



月刊 第574号

天気に分ける

祭りの明暗

俳句では祭りは夏の季語と言
うことになっていいるが寺泊では
四月五月の春の真盛りの季節こ
そ祭り時である。

俳句では祭りは夏の季語と言
うことになっていいるが寺泊では
四月五月の春の真盛りの季節こ
そ祭り時である。

承に熱が入り初めているようだ。
生活改善運動と称し質素な形
で行われてきた結婚式や葬式が
業者サイドの誘導ではでではし
くなり過ぎて一寸眉をひそめた
くなるような思いさえ感じるよ
うになって久しいのだがこれも
又近頃は落着いてそれぞれ手づ
くりの思いを込めた形で行われ
るようになってきたように感じ
られる。

時代要請と相俟って興味深い限
りである。
しかし祭りは何と言ってもお
天気次第で、雨祭りは何ともし
んぼりさせられてしまふ。

寺泊の連休の人数は県下一の十
万五千人。先ずは目出度し。



白山宮の行列も各区で分担するお手伝いが高令化のせい
か、年々大変なようで頭の痛いところ。今年も外国の方
も参加。国際親善に一役か。



輿の担い手は厄年の面々。若さも少々下り坂にかり、
肩当てに喰い込む重量に耐えるのも午後にかかるのと仲々
こたえるようだ。



各町内の神社の子供かぐらもこれ又少子化の波をもろに
かぶって人集めに大変。最近では女の子も一役買って、こ
こでも男女均等法適用。

祭りの記憶(2)

さとうのぶひと

前号の「祭りの記憶」で、聚
感園に小屋掛けした「蛇食い女
の見せ物を取り上げました。今
回はその続きです。

世間の人から「寺泊のお祭り
はどんな催しがあるのか」と聞
かれれば、町内全域をめぐる神
輿行列と大神楽、と答えるのが
普通でしょうか。しかしあくま
で、白山媛神社で執り行われる
神事が核となっています。境内
の舞台で行われる奉納太夫舞。
また、子ども達による小神楽も
欠かすことができません。



こちらはおしゃか様の誕生を祝っての花祭りのおねり。
今年はおしゃか様から荒町義泉寺まで。危ぶまれた天気も行列到着まで無事。



5月16日は観光魚まつり。残念乍ら雨にたたられ1,500人以上集まったよさこいソーランは文化会館での催しとなったが、熱気はついに雨をものともせず屋外へ繰り出した。



こちらは海辺の取巻祭。みんなで御馳走を食べつくし飲みつくそうと言う催し。集まった180人は自信溢れる健康家揃、美酒に和洋中華一飲み食いは理屈ぬき。

寺泊には「港まつり」や「親光まつり」など、時代の変化に応じた新しい祭りが積極的創造されてきたが、五月三日、四日の大祭は伝統と歴史が重んじられます。

しかし「祭り」というと、子どもの頃は、たくさん露店の立ち並ぶ日、と思っていました。露店の並ばない祭りなんて、祭りじゃない。子どもにとって祭りは、イコール露店のにぎわいなのです。

露店商は「ヤシ」と呼ばれました。「香具師」と書くことは後年に至って知る訳ですが、大人が「ヤシ」と言う時、そこに含まれる差別的な雰囲気子ども達も感じ取っていました。遊んでいて野暮をしたり、誤魔化

したりすると「ヤシをした」と言われ、それが子ども達のあいだで流行語になっていった時代がありました。

「香具師の口上」という言葉があります。「口上」の芸で粗悪品を高値で売りつけることを指します。しかし、口車に乗せられ粗悪品をつかまされても、見事な口上を聞いたのだから恨みっこなし、という暗黙の了解があったように思います。それが「祭り」というものの酸し出す「気分」なのでしょう。

筆者が覚えていた「香具師の口上」は、法福寺さんの上り口に店開きしたセトモノ屋でした。これがすごかった。まさに立て板に水のごとく、でした。何重にも大人達の人垣が出来、そこ

をかいくぐって前に出ると、低音の響く声の主がいました。浅黒顔の鋭い目つきは、テキヤとして百戦錬磨の修羅場を経た怖さを感じさせました。

しかし、駄洒落に語呂合わせ、時にストーリーを交えて、露店をまるで劇場のように演出し、セトモノを売る露店商というよりは、「咄家の芸」を売る役者のようでした。

入れ替わり立ち替わり人垣が変わっていきましたが、飽きることもなくずっとセトモノ屋の前立ちつくしていた記憶があります。

東京へ出たばかりの頃、巢鴨に住んでいる友人を訪れ、有名な「トゲ抜き地蔵」の緑日に偶然出くわしたことがあります。

話を聞いていた「バナナの叩き売り」というのを初めて見ました。早口でまくしたてる「香具師の口上」は溪流のように激しく流れ、オチは滝のように見事でした。この時すぐに、寺泊の祭りで見たセトモノ屋を思い出したものです。

近年東京へ出かけ、浅草や上野を訪れても大道香具師の姿を見ることはほとんどありません。縁日や祭りに立ち並ぶ露店のどこを探しても、まともな「香具師の口上」が開ける店はもうありません。

山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズには、トラさんの「香具師の口上」が一作ごとに必ず入っています。「香具師」という言葉はすたれ「バナナの叩き売り」はなくなりました。もはや「香具師の口上」は、テレビか映画でしか聞くことができないうです。

白山媛神社の大祭を構成していた、記憶に残る周辺の大道芸があります。町の家々を一軒ずつ門付けして回った獅子舞です。誌友の中で記憶されておられる方もあるのでは。女の人が太鼓を叩き、男の人が獅子頭を持っていました。子どもにとっては、おじさん、おばさんと呼んでいくくらいに年齢好です。

三日の主行事が終わり、たいがい家が寛ぐ四日だったと思えます。いきなり、太鼓を鳴らして獅子舞が土間に入ってきた。おばさんが太鼓を叩きながら「ご家内安全」とか「ご商



連休を迎える4月25日(日)町をあげてボランティア清掃活動。冬の怒涛が運んだゴミの除去に約1,000人が参加。中央海水浴場会場で挨拶する高橋町長。



観光協会主催の海浜植物観察会。講師は県自然観察指導員会長 柴田治氏。約50名が参加。寺泊の海辺の自然にふれた。



聖徳寺の山門に新しい高札が建った。本山門主を迎えるお知らせ。当日は夜、シンセサイザーのコンサートも催される。

「売繁盛」と口ずさみ、それに合わせて獅子頭を持ったおじさんが舞います。
父親はひとしきり終わったのを見届けて、予めいくつか用意してあった祝儀袋を渡します。そして「まあ、一杯やっつけて」と茶碗酒を獅子頭のおじさんに振る舞います。おじさんはまるで水でも飲むように、くいと一気に飲み干しました。
この獅子舞は何年か継続して寺泊の大祭に来ていたと思えます。父親が「あれは夫婦なんだ」と誰かに言っていたのを聞いたことがあります。
ある年の祭りでした。路上でこの獅子舞の夫婦を見かけました。おじさんは腰を抜かしたよ

りに路上にへたり、獅子頭を抱えて寝そべったりしています。おばさんが大きな声でおじさんを叱りつけています。どうやらおじさんは振舞酒をやりすぎて動けなくなったものと思われました。
後年、フェデリコ・フェリーニ監督のイタリア映画『道』を見た時、この獅子舞の夫婦を思い出したことは言うまでもありません。
大町の子供達(3)
大町 松田圭司

戦争末期になると東京の空襲を逃れて昭和十九年葛飾区梅田小学校から三年生以上の生徒約六百名が学童疎開でやってきて
金山の松田屋、大町の住吉屋、藤田屋、みのや、田甚に分宿しました。親元をはなれ而も食べ物にも充分ありつゆぬ時代でしたから何時もひもじく、皆んな少し元気がなく地元の子供達ともあまり馴染まない様子でしたが、その中で一際背が高く、鬼歯(犬歯)の出た鬼沢君と言いう元気の良い同級生がいました。彼だけは物怖じせず私達とよく遊びました。それから数十年振りには寺泊へ訪れた旧疎開児童の中にその人の姿を見つけた私の子供達は「オニさんオニさん」と叫んでいました。彼は某テレビ局の芸能キャスターで子供達には馴染みの人だったので。
戦争が終ると疎開児童は東京

へ帰り、その代りに進駐軍がやって来て、田舎の寺泊でもチエッコ銃を肩にジブに乗った兵士が見られるようになりました。子供達はジブのあとを追いかけてチョコレートやチューインガムをねだっていました。「鬼畜米英」と学校で教わっていた子供達が……。今は昔。(終)

誌代御後援 (敬称略・順不同)	
東京都	野村 稔 金五千元
入間市	真弓田みよ 金三千元
北川市	北村 良子 金三千元
丸山	丸山 黎 金五千元
吉田	吉田 守正 金三千元
前田	前田 昭 金三千元
宮前	宮前 里子 金三千元
浅野	浅野 宣子 金五千元
三條市	分木町 寺泊町 金三千元
長岡市	有沢真佐子 金三千元
佐藤	佐藤 良夫 金三千元
西山	西山 賢二 金三千元
石川	石川 和枝 金三千元
小野田	小野田 正 金三千元
新潟市	取手市 金三千元
北本市	小川原 喬 金三千元
金沢	金沢 サダ 金三千元
石川	石川 和枝 金三千元
小野田	小野田 正 金三千元
佐野	佐野 賢二 金三千元
西山	西山 賢二 金三千元
佐藤	佐藤 良夫 金三千元
住川	住川 健 金三千元
有沢	有沢真佐子 金三千元
松本	松本 富市 金三千元
柳下	柳下 祐二 金三千元
加藤	加藤 千代 金三千元
佐藤	佐藤 仁一 金三千元
山田	山田 キヨ 金三千元
小黒	小黒 キクイ 金三千元
後藤	後藤 ハツ 金三千元
大宮	大宮 正和 金三千元
山田	山田 太郎 金三千元
石塚	石塚 力 金三千元

小波会五月句会詠草

兼題 行く春・踏青他当季
越後路の

田に水満ちて春行けり
江原 汀子

暁鐘の
余韻は長し春惜しむ
大越碧水子

行く春や
物音絶えし路地に入る
外山 海子

靴下も
脱いで踏青子らの声
内藤 蓮子

踏青の
大地の弾みやはらかし
小島 冬扇



新緑が目にも沁み、心洗われる季節。お天気に誘われて国上山へ散策。国上寺脇の公園にある良寛和尚と童達の遊ぶ像。

リハビリの

妻とゆっくり青き踏む
水沢 蕉子

青き踏む
首輪の光る小犬かな
加勢 白汀

五月来て
いざ旅立たむカヘラスへ
竹内 霍山

潮騒の
届く山細匂い鳥
小島 温石

ご自慢も
添えて山菜貰ひけり
中村 流瓢

はつ夏の
風にはためく大轆
斎藤 紫苑



本来なら今頃が稚アユ魚の最盛期。海からのぼって来る稚アユを網ですくって上流へ搬送する。7月の開禁までに水ゴケで育って成魚となる。今年は増水で皆目駄目。

一回り

大きな夕日夏来たる
外山きよし

箸目を
つける作務僧松の花
小形 美代

村々の
祭りのはなし蓬摘む
能登 頑牛

あとがき

今月初旬の連休は農村部では一勢に田植えの季節となる。水を引き込んだ代田は早苗を待つ時母の懐を思わせるように静かで豊かでやさしい表情をみせる。夕日を映して昏れなむ時神々しい感じさえ受ける。その田圃も已にすっかりと根

を張った苗は大分成長して整然と連らなる姿はこれ又初夏のすがすがしい光景で、わたりくる風に色がうつるようである。新緑の季節はそのエネルギーが人間の心身を刺激し活気づけてくれるようだ。私の寺の本堂入口の脇に一本の百日紅の木がある。五十七年前の火災ですっかり焼けたために絶えてしまったと思っていたら三年程して芽を出した。だから五十四、五年になるのだが昨年暮れに剪定して貰ったらどうも切り過ぎたのか一向に芽生えず心配していたら十日程前に点々と赤い芽が顔を出した。芽生えたとすると柔らかに感ずるが、その芽はあの固い百日紅の表皮



各町内の神社の祭り即町内祭りは4月に催される。この地区愛宕神社はシンガリ藤まつりと称して、藤の花の季節を待って催される。今年は花が早かった。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより

誌代共(百円)

編集人 中 村 興 樹

発行人 新 潟 県 寺 泊 町

ふるさとだより

郵便番号 九四〇二五〇二

ダイヤル局番 〇二五八七五

電話 二〇二九番

振替番号〇六二〇三二七四五
印刷所 吉野印刷株式会社